
怪話篇 第十六話 賢者の石

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪話篇 第十六話 賢者の石

【コード】

N0357U

【作者名】

K1・M・Waki

【あらすじ】

代々天才を産み出してきた松戸家。そこに伝わる「賢者の石」とは…

「で、その話に確証はあるのかな？」

「勿論よ。あちこちの大学の専門家に古文書のきれっぱしの年代測定を頼んだら、バツチシ江戸時代の中期と出たんよ。間違いなし。」

「そうかねえ。にしては、書いてある内容が荒唐無稽過ぎないかねえ。第一、江戸時代の初めに既に電磁気学と量子力学の基礎が完成してるなんて誰が信じられるかい。」

「仕方ないでしょうが、その古文書にそう書いてあるんだから。全く、源さんも疑り深いねえ。あたしゃ、そんな事なんぞどうだっていいのさ。そこに書いてある通りに、お宝がありさえすればいいのよ。」

「全くおまえときたら、本当に楽道家だなあ。まあいい。それで、その秘宝とやらは、本当にあるのかい？」

「へっへっへっ。それはもうバツチシで。あのアル中じいさんが死ぬじまう前に確かめといたよ。しかし、元刑事だか何だか知らねえが、ああなっちゃんおしまいだね。酒飲むと、どっかの山奥に化け物の村があるとか総理大臣は偽物だとか言っつてわめくんだから、始末におえないねえ。」

「・・・で、古文書の残りも手に入れられそうか？今度の仕事の鍵はそれしただぞ。」

「まかしときなさい。丁度上手い具合いに、先祖代々松戸の家の財産管理をやつてた奴を見付けてねえ。今じゃ落ちぶれてて、金さえ出しゃ古文書でも何でもオツケーでさ。」

「本当に大丈夫なんだろうな、西岡。おまえと話していると、段々心配になってくるぞ。・・・まあいい。金はすぐ用意しよう。早く

残りを手に入れるんだ。」

「判ってますって。まあ、大船に乗った気でいてくださいえ。」

2

「よお、おまえさんが竹村さんかい？例のモノはちゃんと持って来ろうな。」

「何に使うのか知らないが、こんな物でも金を出して引き取るというのだから、こっちとしては大助かりだ。さつさと持って行ってくれたまえ。」

「……西岡、……本当に間違いないんだろうな？何かおかしいぞ。」

「源さん、間違いありませんって。そうですねえ、竹村さん。」

「言ってる意味がよく判らないが、君達の欲しいと言ってきたものはこれじゃないのか？こんな物、いつまでも置いていても邪魔になるばかりだから、持って来たのに。一体、どうするんだい？」

「ふん！上手い事言って、宝を独り占めする気か。そっちがその気なら、話は早い。松戸家の秘宝について何か知っている事を話してくれたら、儲けは山分けといこうじゃないか。」

「秘宝？この文書には、宝なんかについては何も書いてはいないぞ。何か勘違いをしているんじゃないのか。」

「竹村さん。こっちだって本音で話をしようとしてるんですけど。ねえ、話して下さいよ。」

「そうだ、松戸家の秘宝『賢者の石』について何か知らないか。」

「『賢者の石』！あれは宝なんかじゃない。それにあれは、……あれは手を触れてはいけない物と謂れて来ている。私からは、それしか言えない。」

「まあ、いいだろう。取敢えず、古文書だけでも貰おうか。百万でいいな。」

「……塵紙交換だな。こっちも、困っていたんだ。助かるよ。それじゃ……」

「またな。」

「また？」

「そう、まただ……。いずれ、おまえさんには手伝って貰う事になりそうだからな。」

「……無理だ。出来ない相談だ。松戸の家には逆らえない。」

「金がいるんだろう、金が。払ってやるうじやないの。ねえ、竹村さん。」

「駄目だ、……。駄目なんだ。本当に駄目なんだ。松戸の家には逆らえない、……。逆らえない様に、……。創られているんだ。」

3

「源さん！とうとう来ましたね。ここに、例の物があるんですねえ。」

「そうだ。天才の一族といわれている、松戸家の秘宝『賢者の石』だ。果たしてどのような物か。」

「あの竹村とかいう奴が怖じけづいた所為で大分手間取りましたが、ココまでくりやあ、もう手に入れたも同じで。」

「判らんぞ。相手が普通の人間じゃないからな。キ印と大して変わらん様な連中の隠したものだ。どんな仕掛けがあるか判らんぞ。」

「それにしても、隠し場所が無防備過ぎやしませんかい。それって本当に大した宝物なんじゃないかねえ。」

「そうだな。元々、『賢者の石』と言っても、一般にいわれているような錬金術に使うものではないらしい。松戸の十何代目かの当主が、江戸時代の初めに造ったものらしいな。」

「『賢者』が造ったから『賢者の石』ですかい？しかし、相当の値打ちモンなんでしょうね。」

「おまえが考えている意味で値打ちがあるかどうかは判らん。しかし、古文書に拠ると『この世の数多、其の内に納ま』っているそうだ。つまり、知識の集大成ってところだろう。」

「百科事典みたいな物ですかい？がっかりだ。」

「そうでもないぞ。例の古文書にしてもそうだが、当時既に現代最先端に匹敵する科学知識を持っていた奴等だ。その総てを記憶している石「IC」なら、どこに持って行ってても言い値で売れる。ひよつとすると、まだ知られていない知識も含まれているかもしれんだろう。」

「あたしにや、やっぱり金銀財宝の方がいいですけどね。後で、金に替わるんなら文句は言いませんわ。でも、竹村は何でそんな大事な物についての古文書を二束三文で売ったりしたんでしょうかね。」

「あれを読んで判ったんだが、確かに松戸にとってはあれは紙屑だな。」

「へっ？」

「この前教えた通り、松戸の家は代々の天才の家系なんだが、それだけじゃなくて、天才を産み出す事にかかなりの執着を持ってたらしい。代々の奥方が子供を宿すと、当主自らが奥方の寝ている横で、まだ胎児の跡継ぎに講義をして教育してたんだとさ。で、産まれると、その古文書だ。要するに、それは教科書だったのさ。」

「は？教科書？じゃあ、松戸家じゃあ今もそんな風に？」

「いや。いらないうつからには、本当にいらなくなつたんだろう。別の方法で、例えば直接脳に知識を送り込むとか、ひよつとすると遺伝子自体に組み込まれているのかも知れん。事実、その手の物は江戸時代以前の物ばかりで、新しい物は一つもなかったしな。だが、『賢者の石』についてのものは違っていた。古文書も新しかった。」

しかし、ああも無防備に書かれてあつたのは、多分俺達を馬鹿にしてたからだろう。確かに、一般人はとるにたらなかつたろうし、価値も判らなかつたろうさ。だが、俺達やあ別だ。」

「源さん、ありましたぜ。」

「禁断の扉か……。開きそうか？」

「ちよい待ち……、こりゃあ……かなりの難物ですぜ。」

手持ちの道具じゃちつと……。それに、この扉……生きて

「まずぜ。」
「金属なのか。．．．さてどうしたものか。」
「開けゴマじゃあ、いけませんかね。」
「何かあるんだろうが、．．．」
「うわっ、このやろっ噛付きやがった。源さん、古文書に何か書いてなかったんですかい。」
「多分、書いてはあるだろうが、．．．。判った、取敢えず場所は判ったんだ。今日のところは一旦出直そう。」

4

「よし！開くぞ！」
「用意は、いいですかい？何が飛び出すか判りませんぜ！」
「いいぞ、いけ！」
「．．．．．」
「おお！」
「開きましたぜ！」
「ココが、．．．ココがそうなのか？どれがそうなんだ？」
「源さん、こりゃあ、どっちかっていうと物置ですねえ。本当に、間違いないんでしょうねえ。」
「いや、間違つてない。とにかく、捜すんだ！」
「へいへい。大体の置き場所とか形とか、判らなかつたんですかい。古文書には書いてあつたんでしょう？」
「少しはな。何せ、あいまいというか、こ難しい専門用語の塊と云うか．．．」
「要するに、判らなかつたって事ですかい。」
「うるさい！おまえなら判つたつて言うのか。文句を言わずに捜せ。」
「へいへい。これも違うしなあ、これは？．．．きっと違うんだろっなあ。」
「『賢者の石』は何十という島や山を溶かし固めて造つたらしい。」

きつと、シリコンを抽出する為だろう。その大きさは、『針の先よりももっと小さい』というから、現代の集積回路以上の情報チップだろう。そんなに大きなものじゃあないが、シールドは嚴重に違いない。よくは判らんが、何かの力場を遮断する箱に封じてあると書いている。ええつと、何なに……」

「外界の電磁場を遮断して情報のビットを安定化してるんですねえ。さてこれは、どうですかい？」

「んー、箱は二尺四方で厚みは一尺だから、……そりゃ違うな。」

「これは、どうですかい？」

「ん？うん！それだ！それそれ。」

「ついに、……ついに、見付けましたね。」

「待て待て。どんな仕掛けがしてあるか。よく調べて見る。」

「んーつと、……うわっ。あーびっくりした。いきなり、ねず……、ゴキブリ？」

「ほつとけ、そんなもん。」

「へっ、へえ。……オーケー、よさそうですぜ。直ぐ開けますかい？」

「まあ、待て。こつちの壁に何か書いてあるぞ。……何なに？これに拠ると、蓋が開いた時には安全装置が働いて数瞬後には閉まって仕舞うそうだ。取り出しは、速やかに落ち着いて。」

「へえへえ。注文の多い人だ。他にはないですね。開けますよ。」

「ふむふむ、箱の中がこうなってるのか。これは一体何を意味するんだ？……これは重さの単位だな。……何、黒？黒だつて！」

「源さん、感動的瞬間だよ。開きますよ。」

「ま、待て。今、計算してるから。ココの数値が間違ってるなら……」

「任せなさい。あたしの『すり』の腕は知ってるでしょうが。おつと、開き始めましたぜ。」

「やはりそうか、シユバルツシルト半径が……おい、開けるな！それは開けちゃいけないんだ。」
「もう手遅れですよ。ほら、こうなっちゃお宝を手に入れるまででさ。さて……げっ、うわぁ。」
「違うんだ、それは宝じゃない！早く蓋を閉めないと、うわっ……でない」と。
「うわああああ、源さああああ……」
「早く蓋を……吸い込まれる前に……それは……それは、ブラッ……」

e o f .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0357u/>

怪話篇 第十六話 賢者の石

2011年10月9日03時54分発行